

ドジョウ養殖動向調査

I 調査目的

県内ドジョウ養殖の現況を把握して、今後の調査計画設定にあたっての資料とするほか、養殖業の確立と普及に努める。

II 調査内容

- 1 調査期間：昭和48年7月～12月
- 2 調査場所：青森県内全域
- 3 担当者：技師 青山 禎 夫
- 4 調査項目：(1) 養殖動向調査
(2) 天然ドジョウ産出量調査
(3) 天然ドジョウ肥満度調査
- 5 調査方法：a 養殖動向調査
県内全域において調査票にもとづく調査を実施して取纏めた。
b 天然ドジョウ産出量調査
出荷業者を対象に出荷量を調査した。
c 天然ドジョウ比較調査
天然ドジョウ主産地である津軽地帯の地域別肥満度を求め比較した。

III 調査結果と考察

1. 養殖動向調査

青森県内のドジョウ養殖の実態を総括すると第1表に示すとおりとなる。

即ち、県内には39の養殖経営体があり、143面の養殖池を持ち、その面積は69,005 m^2 となっている。

第1表 青森県のドジョウ養殖（昭和47年）

地 域	経 営 体 数	養 殖 池 数	養 殖 面 積	出荷量（46年）
青 森 市	1	1面	50 m^2	—
弘 前 市	1	3	2,970	—
東 津 軽 郡	13	31	9,955	—
西 津 軽 郡	5	22	15,412	4,000 kg
北 津 軽 郡	2	15	7,495	300
上 北 郡	2	27	13,290	1,500
下 北 郡	5	19	9,033	—
三 戸 郡	10	25	10,800	70
計	39	143	69,005	1,870

地域別には、東津軽郡と三戸郡に養殖者が多いが、養殖池の面積では西津軽郡、上北町、三戸郡が他地域に較べて規模が大きい。

養殖の規模と経験年数（養殖開始）をみると、第2表のとおりとなり養殖開始が昭和47年の経営体は15で最も多く、次いで45年の12経営体となっている。

第2表 養殖開始年別、養殖面積別経営体数

養殖面積 \ 養殖開始年	昭和 44	45	46	47	計
0 ~ 1,000 m ²	2 経営体	6	8	8	24 経営体
1,001 ~ 2,000	—	1	1	5	7
2,001 ~ 3,000	—	3	—	1	4
3,001 ~ 4,000	—	—	—	1	1
4,001 ~ 5,000	—	—	—	—	—
5,001 ~ 6,000	—	1	—	—	1
6,001 ~ 7,000	—	1	—	—	1
7,001 ~ 8,000	—	—	—	—	—
8,001 ~ 9,000	—	—	—	—	—
9,001 ~ 10,000	—	—	—	—	—
10,001 ~ 11,000	—	—	—	—	—
11,001 ~ 12,000	—	—	—	—	—
12,001 ~ 13,000	1	—	—	—	1
計	3 経営体	12	9	15	39 経営体

(注) 47年に養殖を継続していない経営体は含まない。

このほかに、過去において養殖に着手したが・成功をみることなく、昭和47年以前に中止または廃業した例も若干みられる。

養殖ドジョウの生産量(出荷量)をみると、昭和46年実績は5,870kg(第1表)で、養殖面積に見合うほどの生産をあげていない。

以上のことから明らかなおと、青森県内におけるドジョウ養殖は、経験も浅く、養殖経営が確立された状況とはいえない。

この原因としては、ドジョウ技術そのものが確立していないという背景もあるが、青森県は現在でも他県に較べて天然ドジョウの産出量が多く、したがって、養殖に対する依存度が低いということも作用している。

今後の方向としては、他県に較べて多い天然種苗(稚ドジョウ)を積極的に活用した養殖形態のもとでの養殖技術を確立することが有利と思われる。この際各地に分散している養殖志望者が個々に着手するのではなく、養殖主産地形成的な構想を推進することが流通機構上からも効果的と思われる。

2. 天然ドジョウ産出量調査

青森県内にはドジョウの出荷専門業者が8軒ある(昭和47年)。

県内のドジョウ出荷業は、昭和22~23年頃から始まり、昭和27~30年の最盛期には20以上の業者を数えたが、産出量の減少と出荷業の煩雑さから転業者が出て、現在は長年の経験から安定経営を続けている8業者となっている。

ドジョウ(天然ドジョウ)の出荷量を第3表に示したが、これによると昭和47年は322トンとなっている。

第3表 青森県のドジョウ出荷量

年	昭和 41	42	43	44	45	46	47
出荷量	450 トン	270 トン	226 トン	210 トン	220 トン	269 トン	322 トン

市場(主として東京)では、入荷量が不足で韓国などからの輸入を進めていることから考えて、生産量を増加させることに対する危機は全くないものと思われる。

昭和44年に最低(210トン)だった出荷量(産出量)が、その後やや上昇している傾向がみられるが、これは漁獲強度が増したためと考えることも出来るが、むしろ大きな要因としては、ド

ジョウの捕獲地帯（水田、用水堰、溜池、小河川）において従来使用していた毒性の強い農薬（PCPなど）が低毒性へ移行したことによる天然資源量の復活とみることが妥当と思われる。

今後は全国一の産出量を保持するためにも、棲息地帯での乱獲防止や捕獲場所の輪番制など統制ある保護規制が必要と思われる。

3. 天然ドジョウ肥満度調査

ドジョウが商品として評価される基準は、重量である。したがって、体長に対する体重の割合が大きいほど商品価値は高い。

県内における天然ドジョウの主産地である津軽地域において体重／（体長）³ × 100（肥満度）を求めたところ第4表の結果を得た。

第4表 ドジョウの地域別肥満度

地 区	市 町 村 名	採 捕 年 月 日	体重／（体長） ³ × 100
弘 前	弘 前 市	昭和 47. 9. 29	0. 80
黒 石	黒 石 市	9. 19 ～ 21	1. 00
南 津 軽 郡	藤 崎 町	9. 29	0. 85
	常 盤 村	9. 28	0. 83
	田 舎 館 村	9. 25	0. 85
	浪 岡 町	9. 26	0. 90
	尾 上 町	9. 22	0. 79
	中 里 町	10. 9	0. 98
北 津 軽 郡	板 柳 町	10. 3	0. 84
	鶴 田 町	9. 1	0. 84
西 津 軽 郡	森 田 村	10. 3	0. 79
	木 造 町	10. 9	0. 93

○ 標本数：7～50尾

この調査は9月～10月におこなったものであるが、地域による大きな差は認められないものの黒石市、浪岡町、中里町、木造町で捕獲したドジョウが、他地域のドジョウに比べて肥満度が大きい傾向がみられた。

したがって、これらの地域を中心にした天然ドジョウの捕獲が有利といえる。

Ⅳ 要 約

- (1) 青森県内には39のドジョウ養殖経営体があり、養殖池は143面、69,005 m²となっている（昭和47年）。
- (2) 昭和46年の養殖ドジョウの出荷量は5,870 kgで養殖面積に比して少ない。
- (3) ドジョウ出荷専業者による47年の出荷量は322トンで、最低出荷量であった昭和44年と較べると、近年はやや出荷量＝産出量の増加傾向がうかがわれる。
- (4) 津軽地域のドジョウの肥満度を比較すると、黒石市、浪岡町、中里町、木造町が他地域に較べてその値が大きい。

Ⅴ 参 考 文 献

1966：青森県のドジョウについて

青森県水産試験場

1972：ドジョウ養殖に関する総合試験

青森県水産試験場